

2024（令和6）年度 学校評価報告書

重点目標： 1. 主体的に学べる教育活動の円滑な実施 2. 社会に貢献しうる有能な人材の育成 3. 学生確保対策強化の継続 4. 教職員の視野を広げ、自ら行動し新たな課題に挑戦する組織運営を目指す

神奈川県立よこはま看護専門学校

	視 点	1 年間の目標	取組の内容		校内評価 2024 年度評価		外部評価委員の	総合評価 (3 月 21 日実施)	
			具体的な方策	評価の視点	達成状況	課題・改善方策等	評価 (3 月 5 日)	成果と課題	次年度の 取組方針
1	教 育 活 動	1. 主体的に学べる教育活動の円滑な実施 1) 教育理念に基づいた新カリキュラムを実施	1.ヒューマン・ケアリングの授業内容の共有と臨床判断の基礎的な力育成 ・専門基礎分野の解剖生理、病態生理や日常生活行動等の関連を意識した授業構築 ・看護過程の領域・年次間の関連性を把握し卒業までの積み重ねを共有する ・統合分野の充実（看護の統合と演習の実施・災害看護でアクションカードを用いた防災意識の向上）の実施と評価 2. 主体的に学ぶための支援 ・基礎力リサーチ、社会人基礎力アンケートの定期的な実施と学生へのフィードバック ・主体的な学びを促すための授業方法や動機づけの工夫（グループワーク、相互性のある授業） ・旧カリ再履修者への読み替え表を用いた本人、保護者への明確な説明と継続支援	・看護学科目 平均点 授業評価 ・シミュレーション実施回数 ・旧カリ再履修者の科目の履修 ・成績 科目平均点	授業評価 ＜新カリキュラム＞ 平均値（前年度） 基礎分野 3.2 (3.5) 専門基礎分野 3.3 (3.5) 専門分野 3.8 (3.8) 臨地実習 3.8 (3.8) ・今年度より授業評価に自由意見の記載欄を設け、学生の声の評価として活用。 ・シミュレーターを使用することでリアリティな学習環境を創り、学びが深まるよう基礎、地域・在宅、成人、小児看護学が授業で活用した。 ・フィジカルアセスメントモデル人形は実習前の技術確認や演習で使用している。 ・教育用電子カルテ：基礎・成人・老年・母性看護学が看護過程の授業で活用した。 ・ナースングスキル使用状況（2024.4～2025.2）閲覧数 48000 回 使用回数（概算） 48 回生 11122 129 回/人 49 回生 16829 193 回/人 50 回生 20117 216 回/人 ・基礎・専門基礎・専門分野で活用 ・後期（10 月）から Google Workspace を導入し、授業資料、授業評価、課題等で活用している。	<u>資料 1・資料 2 参照</u> ・新カリキュラムに移行後 3 年目となる。1 年次より講義や演習の中で、リフレクションやナラティブの時間を意図的に設け、内省や看護を語る機会を増やしたことが積み重なり、ヒューマン・ケアリングⅢでは実習で体感を語り、自己を看護者として俯瞰してみる力をつけていることを確認できた。「多職種連携」では、実践者である講師より IPW（専門職間協働実践）について臨床の事例から学びを深めることができた。 ・授業（実習）評価では、学生からの自由記述の意見に対し、必要時教員から改善策等を掲示し学校としての対応を示した。 ・臨床判断能力の素地を学ぶ「統合演習」では、3 年間学んだヒューマン・ケアリングの視点や臨床判断する上での知識、技術、実践の大切さを学び、看護者として対象に関心をもち関わる重要性を再認識できた。 ・ユニフィケーションの一環として、実習施設の臨床指導者と教員が連携し、各学年の演習に授業者として参加することで学生の学びを促進することができた。 ・シミュレーションを取り入れたリアリティのある演習を通じ、看護実践とともに思考の育成を目指している。 ・動画教材を視聴することで、事前にイメージしてから学べるよう、ナースングスキルを各看護学で自己学習のツールとして学内及び実習で活用している。 ・Wi-Fi 導入及び Google Workspace（以下 GWS とする）活用においては、情報の取り扱いについて学生の情報リテラシーを高める必要がある。各実習前に学生の ICT 委員会を中心に学生全体に伝達を行った。モラルをもち安全に情報を取り扱うことができる看護師の育成を目指す。 ・Wi-Fi 導入に伴う GWS 活用により、プレゼンテーションや資料共有がスムーズにできるようになったが、このことが学生の学習結果と関連しているか評価する必要がある。また、災害等で学生が登校できない状況が生じた際に、オンライン授業が実施できるよう各学年で試行を検討している。	・教育理念に基づきヒューマン・ケアリングの視点を養い、臨床判断する上での知識、技術、実践の大切さを学び、看護師としての資質・能力の育成にしっかりと取り組んでいる。 ・1 年次から内省や看護を語る機会を設け、自己を看護者として俯瞰してみる取り組みは、看護専門職として自分の言動に責任を持つという教育につながり大変良い。 ・座学の講義だけでなくシミュレーターを用いたトレーニングも組みこまれていて良い。 ・シミュレーターやナースングスキルの活用は、新人から求められる実践力の育成に役立つ。 ・授業や課題において、デジタルツールを活用するための教育がされており、効率化や主体的な学びを促している。 ・ICT 活用は必須であり、一般的倫理観に加え医療者としての倫理観や自覚が持てるような指導が大切である。 ・デジタルツールの利用自体の習熟が目的ではなく、教育の補助手段として考え、コミュニケーション力向上を第一に教育を進める必要がある。	・心理的安全性を担保し、授業や実習での自己の経験を語る場を、繰り返し行うことで自己理解や他者理解につなげられるようにする。 ・デジタルツールを安全に活用するとともに、対面授業での対話を通じてコミュニケーション能力の向上に努める。 ・臨床判断能力は知識と経験に基づくものである。看護基礎教育では、知識を身につけるための学習を主体的に行えることを目指し、臨床判断能力の基礎的な力が育成されるように支援していく。	・ICT 教育を引き続き推進していくと同時に看護師として求められるコミュニケーション能力が強化できるよう学生を丁寧に育ていく。 ・学内でのシミュレーション教育を充実することにより、臨地での対象の状況がイメージできるような教育の工夫を行い、臨床判断能力の基礎的な力が育成できるよう支援していく。
		2) 安全かつ円滑、効果的な教育活動の実施 ①講義 ②実習	【講義】 1.3 年次新カリキュラム科目の円滑な運用と確実な実施 アクティブラーニング（シミュレーション、ロールプレイ、グループワーク等）を用いた主体的に学べる学習方法活用 【実習】 1.臨床判断の基礎的な力を身につけていくため、会議等で共有と各領域の看護	【講義】 ・出欠席状況の把握 ・既習得認定と履修登録状況 【実習】 ・実習科目 平均点 ・実習記録の電子化	【実習】 ＜実習施設＞ ・病院 22 施設	【実習】 ・今年度も時期により感染症が流行する状況は見られたが、全ての実習を臨地で実施でき	【実習】 ・臨地実習で実際に患者様と関わり、実践できることはその	【実習】 ・実習時間が短く、臨床現場での見学や看護	・学生の心理的安全性を担保しながら、社会

		過程の学びを理解した実習指導の実践。 2.多職種連携教育を意識した多職種カンファレンス等への参加（1年次から3年次の実習全て） 3. 実習指導者研修会開催による臨地実習者との臨床判断育成の考え方の共有 4. 実習記録の電子化に向けた検討（安全性や学習効果等） 5. 課題のある学生に対する継続的支援とともに教員間、施設との連携の強化 6. ユニフィケーションの効果的な実施（活動内容を活かした新カリキュラム授業の構築と実習支援）	臨地実習中クラスター0% ＜臨地実習実施率＞ 2023 年度 3 年 臨地 98.6% 2 年 臨地 100% 1 年 臨地 92.2%～100% ＜臨地実習不合格者率＞ 2023 年度 <table><tr><th>学 年</th><th>実習内容</th><th>割合</th></tr><tr><td rowspan="7">3 年</td><td>成人Ⅲ</td><td>3.6%</td></tr><tr><td>老年Ⅱ</td><td>4.8%</td></tr><tr><td>小児</td><td>0</td></tr><tr><td>母性</td><td>1.2%</td></tr><tr><td>精神</td><td>1.2%</td></tr><tr><td>在宅</td><td>0</td></tr><tr><td>統合</td><td>0</td></tr><tr><td>2 年 新カリ</td><td>3.4%</td></tr><tr><td>1 年 新カリ</td><td>0%</td></tr></table>	学 年	実習内容	割合	3 年	成人Ⅲ	3.6%	老年Ⅱ	4.8%	小児	0	母性	1.2%	精神	1.2%	在宅	0	統合	0	2 年 新カリ	3.4%	1 年 新カリ	0%	・訪問看護ステーション 18 施設 ・地域包括支援センター16 施設 ・保育園 5 施設 ・地域生活支援施設 16 施設 ・介護老人保健施設 11 施設 ＜臨地実習実施率＞ 2024 年度 臨地 100% ＜臨地実習 不合格者率＞ 2024 年度（全学年新カリ） ※3 年生：評価対象外 計 6 名 <table><tr><th>学 年</th><th>実 習</th><th>割 合</th></tr><tr><td rowspan="7">3 年</td><td>健康Ⅳ</td><td>不合格 1 名(1.2%)</td></tr><tr><td>健康Ⅴ</td><td>不合格 1 名(1.2%)</td></tr><tr><td>小児</td><td rowspan="5">全員合格</td></tr><tr><td>母性</td></tr><tr><td>精神</td></tr><tr><td>地・在</td></tr><tr><td>統合</td></tr><tr><td rowspan="3">2 年</td><td>健康Ⅰ</td><td rowspan="3">全員合格</td></tr><tr><td>健康Ⅱ</td></tr><tr><td>健康Ⅲ</td></tr><tr><td rowspan="2">1 年</td><td>日常Ⅰ</td><td>全員合格</td></tr><tr><td>日常Ⅱ</td><td>不合格 1 名(1.1%)</td></tr></table> ＜実習評価＞学年平均 <table><tr><th>学年</th><th>実 習</th><th>平均点</th></tr><tr><td>3 年</td><td>全実習 (7 領域)</td><td>83.7 点</td></tr><tr><td>2 年</td><td>健康Ⅰ～Ⅲ</td><td>83.4 点</td></tr><tr><td>1 年</td><td>日常Ⅰ・Ⅱ</td><td>83.5 点</td></tr><tr><td colspan="2">全実習平均</td><td>83.5 点</td></tr></table> ＜補習実習＞ （全学年）3 名（昨年比(全学年)6 名） ＜実習指導者研修会＞ ・テーマ「臨床判断の基礎的能力を育成するための支援」 8/5 参加者総数 95 名 26 施設 71 名 教員 24 名 ＜実習記録の電子化＞ ・後期より実習調整・ICT 委員が連携しながら検討中 ・日常生活援助実習Ⅱより GWS を活用し「学びのレポート」を電子記録可とした。 →2024 年度 日常生活援助実習Ⅱ 電子記録率 58%	学 年	実 習	割 合	3 年	健康Ⅳ	不合格 1 名(1.2%)	健康Ⅴ	不合格 1 名(1.2%)	小児	全員合格	母性	精神	地・在	統合	2 年	健康Ⅰ	全員合格	健康Ⅱ	健康Ⅲ	1 年	日常Ⅰ	全員合格	日常Ⅱ	不合格 1 名(1.1%)	学年	実 習	平均点	3 年	全実習 (7 領域)	83.7 点	2 年	健康Ⅰ～Ⅲ	83.4 点	1 年	日常Ⅰ・Ⅱ	83.5 点	全実習平均		83.5 点	た。健康状態別実習Ⅱ(介護老人保健施設)では感染症の状況をみながら一部学内実習を取り入れた。 ・今年度 3 年生は新カリキュラムでの初めてのの実習であったため、実習施設との打合せを密にし、円滑に実習が開始できるようにした。実習開始後は、指導者・教員間の連携のもと指導を行うことができた。ユニフィケーション施設においては、ユニフィケーション教員を中心に施設と連携し、実習指導の充実を図ることができた。実習評価(全実習)の平均点は 83.5 点で学び多き臨地実習となった。 ・課題が大きい学生は、実習指導者や教員間で連携を図り学生支援の強化を図っている。昨年度と比較すると今年度は、目標到達に至らず不合格となった学生数は減少し、学生支援強化の効果ができていると考える。今後も指導者や教員間で連携を図り実習での支援を継続していく。 ・今年度は 3 年生において、評価対象外で実習単位が未修得となった学生が増加した。いずれも体調不良により実習を継続する事が困難となり単位未修得となっている。次年度再履修予定のため、担任と連携し支援体制強化に努める。 ・1、2 年生は全体的に発信力やストレスコントロール力、踏ん張る力が不十分であり、実習中の緊張や不安が強く、実習中に感じている思いの表出が苦手な学生が散見される。タイムリーな学生支援を行う為にも、学生には適時発信することの大切さを伝え、学生の心理的安全性を大切にした実習環境を整えていきたい。また実習での様々な経験を通して学生の成長（知識・技術・態度）を支援していく。 ・今年度テーマの臨床判断能力の育成は臨床・教育側とも関心が高く、実習指導に関する悩み等の解決につながる満足度の高い研修となった。学生との関わりや実習指導に困っているという意見等があり今後の内容として検討する。 ・ICT の整備に伴い、実習記録の電子化に向け検討中である。電子媒体の選定やマニュアル等の作成、指導方法の見直し等、臨床施設とも連携し準備を進めたい。GWS を後期から導入し、一部記録を電子記録可とした。今後とも実施可能部分から電子化を推進する。	後の学びの大きな自信につながる ・新カリキュラムとなり、相対的に臨地実習の時間数が減少したにもかかわらず、実習評価の平均点が良いことから「臨床判断能力」が培われたのだと推察される。 ・「多職種連携」を実践者から講義を受けることでより現実味のある学びとなり、3 年次の統合実習の場に活かすことができるのではないかと。 ・1・2 年生において、実習中の緊張や不安が強く、踏ん張る力が不十分な傾向が見られる。事前に実習に向けた実技形式の授業を多く取り入れることで、実践的な経験を積む機会を増やすことが望ましい。	師の思考過程を知ること、学内で学習したことを臨地と協力し、臨地で深められるように意味づけながら指導を行っている。 ・これまで通り実習ごとにナラティブやリフレクションの時間を設け、自分の言葉で看護体験を語ることにより、自己内省し俯瞰できる力や相手の状況を捉える力を培っていきけるよう支援していく。また、教員は学生の成長や学びを承認し、学生にフィードバックすることで学生が安心して学べる環境を提供することを心掛ける。	人としての基本的なルール、態度が養われるよう教員自らがモデルとなり教育を行っている。
学 年	実習内容	割合																																																																			
3 年	成人Ⅲ	3.6%																																																																			
	老年Ⅱ	4.8%																																																																			
	小児	0																																																																			
	母性	1.2%																																																																			
	精神	1.2%																																																																			
	在宅	0																																																																			
	統合	0																																																																			
2 年 新カリ	3.4%																																																																				
1 年 新カリ	0%																																																																				
学 年	実 習	割 合																																																																			
3 年	健康Ⅳ	不合格 1 名(1.2%)																																																																			
	健康Ⅴ	不合格 1 名(1.2%)																																																																			
	小児	全員合格																																																																			
	母性																																																																				
	精神																																																																				
	地・在																																																																				
	統合																																																																				
2 年	健康Ⅰ	全員合格																																																																			
	健康Ⅱ																																																																				
	健康Ⅲ																																																																				
1 年	日常Ⅰ	全員合格																																																																			
	日常Ⅱ	不合格 1 名(1.1%)																																																																			
学年	実 習	平均点																																																																			
3 年	全実習 (7 領域)	83.7 点																																																																			
2 年	健康Ⅰ～Ⅲ	83.4 点																																																																			
1 年	日常Ⅰ・Ⅱ	83.5 点																																																																			
全実習平均		83.5 点																																																																			
3) ICT を活用した教育活動の推進	1.Wi-Fi 回線の利用開始を目標とした体制整備（後期開始） 2.ICT 教育基盤の整備 Google Workspace（以下 GWS）及び運用のルール化（教職員・外部講師・学生）と運用、教員研修企画（GWS 等の導入・活用）	・ICT 教育基盤の整備 Wi-Fi 及び GWS 導入及び運用状況 ・GWS への資料配布状況	・今年度テーマの臨床判断能力の育成は臨床・教育側とも関心が高く、実習指導に関する悩み等の解決につながる満足度の高い研修となった。学生との関わりや実習指導に困っているという意見等があり今後の内容として検討する。 ・ICT の整備に伴い、実習記録の電子化に向け検討中である。電子媒体の選定やマニュアル等の作成、指導方法の見直し等、臨床施設とも連携し準備を進めたい。GWS を後期から導入し、一部記録を電子記録可とした。今後とも実施可能部分から電子化を推進する。	・実習中は記録に要する時間が多く、睡眠不足から体調不良になる学生も多いので、電子化の推進は評価できるが、活用において情報管理とともに倫理観も重要になる。																																																																	

2025/ 3 /21 学校運営評価外部委員会								
			Wi-Fi 下での教育用電子カルテ、ナースィングスキル、シミュレーションモデル等の活用 3.個人情報保護等に基づく情報管理（学内授業・臨地実習、日常生活） 4.学生の情報リテラシーの向上のための取組みの支援（学生の委員とともに）	・SNS や iPad 使用の個人情報管理 アクセシデントレベル・件数	＜実習でのヒヤリ・ハット件数＞ 年間：30 件（前年 53 件） ・個人情報に関すること ・物品管理に関すること ・看護技術の学生単独実施など	・実習でのヒヤリ・ハット事例はタイムリーな共有により安全に実習を実施できた。今後も発生要因を分析し事象を振り返り、学生のリスク感性を高めながら、医療安全の意識形成へ繋げる。		
2	学校運営	1. 職員の視野を広げ、自ら行動し新たな課題に挑戦する組織運営を目指す 1）教職員一人ひとりが 常にリスクマネジメントを行い不祥事の未然防止 2）教職員が自ら考え行動し、キャリア形成を意識した自己研鑽に努め、目標管理の徹底と業務成果の向上	1. ヒヤリ・ハット事例の共有・検討 2.リスク管理会議の定期的開催 ハラスメントへの対応に関する体制の整備（Will における弁護士の活用・相談） ハラスメント防止に関する講演会（学生・教員）の開催 3.規程及びマニュアル類の作成・見直し・周知・運用 4. 研修会の実施（GWS 導入、ハラスメント等） 5. 学生を含めたリスク管理（事故防止・情報管理・感染防止）の強化 <					

		3) 教職員の働き方改革の推進と 効果的なタイムマネジメントの実施	1.オフィス環境改善事業の計画的な運用。フリーアドレス実施において、より一層対話を重視できるようにする。 2.GWS 導入後の活用に伴う業務の効率化（資料配布や授業評価等） 3.働き方改革 会議の持ち方：効率的なヒアリングやメンバー間の事前共有による会議時間削減（1 時間以内） 業務の見える化：業務の進捗状況の共有や事業時期や業務量の調整し班や領域で共有の上、時差出勤やテレワークを実施する。 4.課・科または班体制ごとに時間管理と休暇の取得について共有、業務調整 計画的な購入計画、物品管理、リース契約内容の確認→必要な物品の購入及び一部契約の見直しへ	・時間外数 ・年次休暇数 ・テレワーク回数 ・物品管理 計画的な購入・リース	・第 26 回 神奈川看護学会 11/30 発表「看護専門学校における社会人基礎力を活用した取り組み」 ＜活動報告＞ 2 件 1. 班体制を維持し、フリーアドレスを 8 月から導入 2. 10 月から Wi-Fi 導入し資料配布、リアクションペーパー提出、授業評価、その他アンケート等を GWS 活用 3. 働き方改革 4 月～12 月 ・時間外 看護科 平均 4.7 時間／月（昨年度 7.2 時間／月） ・年次休暇 7 日以上 22 人（78.6%） 平均 11.5 日 ・テレワーク回数（～1 月） 1 人当たり 1.7 回/年 ・拡大時差出勤 1 人当たり 34.3 日/年 ・実習施設との Zoom 会議 打ち合わせ全 55 件中 22 件 4. 計画的な物品購入、リース契約内容や期間の見直し ・実習費の見直し	・Wi-Fi 導入等により、GWS の稼働が開始され、資料配布や回収等において紙面を使用することがほとんどなくなり、効率性や経済性の面で向上がみられた。また、フリーアドレスにおいては、自身の役割や業務により座席を選定しながら教員間で連携が行えることにより、総じて時間外の削減に結びついたと考えられる。勤務形態については、テレワークや拡大時差出勤の活用が大幅に増え、自身のワークライフバランスに合わせた働き方が定着しつつある。今後はさらに自らの役割や時期に応じ、班単位や担当看護学において自律的に計画性をもって調整のもと活用する。 ・物品購入やリース期間については、優先順位や重要度に応じて購入等を検討した。リース契約期間については、期間を長期化することで起案を複数回行う煩雑さを少なくし業務改善につなげた。 ・実習費は物価上昇等の現状をふまえ、値上げを検討中。	・Wi-Fi 導入による GWS の活用により業務の効率化および経済性の向上が見られた。これをさらに推進し、教員・学生ともに積極的な活用を促すことが重要である。 ・GWS の稼働が開始され、時間外の削減につながり、時差出勤やテレワーク等働き方改革が効率的に促進されている。 ・フリーアドレスの成果として教員間の連携が進んで時間外の削減に結びついたことは働き方改革の面でとてもすばらしい。職員の働きやすい働きがいのある学校（職場）となる。	・Wi-Fi 導入による GWS 活用、フリーアドレス制導入、テレワークや拡大時差出勤の活用により、教員の効率的な業務のタイムマネジメントができるようになった。そのこととともに、学生からの相談等がタイムリーに受けられるよう重要度や緊急度に応じた対応ができるようにしていく。学生にも看護師を目指す社会人として計画性を持った責任ある行動がとれるよう指導を行う必要がある。	・教育の効率性を図る一方で、教育の質の向上を目指し、社会人として学生の個別に合わせた丁寧な指導・支援を行う。																								
3	学生支援	1. 主体的に学べる教育活動の円滑な実施 1) 学生とともに つくる学校運営を実施	1. 年間計画をもとに学校行事や委員会活動が実施できるように支援 2. 学生の委員会活動の活性化と学生間での連携の強化 3. インスタグラムによる広報活動による本校の魅力や学生の活動の積極的発信	・社会人基礎力アンケート値（全学年）	やまゆり祭参加者数 342 名 高校生 20% 10 代 11% 20～30 歳代 21% ・社会人基礎力：平均値 <table><tr><th colspan="2">社会人基礎力</th><th colspan="2">最終回／全 3 回</th></tr><tr><th></th><th>1 年</th><th>2 年</th><th>3 年</th></tr><tr><td>アクション</td><td>5.33</td><td>6.28</td><td>6.69</td></tr><tr><td>シンキング</td><td>5.13</td><td>5.98</td><td>6.45</td></tr><tr><td>チームワーク</td><td>6.25</td><td>6.91</td><td>7.08</td></tr><tr><td>倫理性</td><td>5.39</td><td>6.11</td><td>6.84</td></tr></table> <u>退学率</u> 1 年 1.0%（前年度 6.1%） 2 年 4.3%（前年度 3.2%） 3 年 2.2%（前年度 3.6%） <u>休学率</u> 1 年 4.2%（前年度 3.1%） 2 年 2.1%（前年度 3.2%） 3 年 6.8%（前年度 0%）	社会人基礎力		最終回／全 3 回			1 年	2 年	3 年	アクション	5.33	6.28	6.69	シンキング	5.13	5.98	6.45	チームワーク	6.25	6.91	7.08	倫理性	5.39	6.11	6.84	・やまゆり祭は学生が主体となり県や地域の方との交流を深めることができた。 <u>資料 3 参照</u> ・社会人基礎力アンケートは、昨年度から調査を開始し 2 年目となる。十分に発揮 8 点、だいたい発揮 6 点、いまひとつ 4 点、発揮できていない 2 点の 4 段階の尺度としている。本調査はホームルームを活用し自身の振り返りとして記載する。どの年次も月を追うごとに全体の伸びが見られ、また年次を追うごとの伸びも見られた。全年次の共通課題として、働きかけ力、創造力、発信力、ストレスコントロール、看護探求があげられるため、実習や学内授業を通して支援を継続していく。 ・退学率は前年度より減少しているが、休学率は増加しており、特に 3 年次の増加が著しい。最近の学生の傾向として、人との関係性が希薄で、精神的に弱い状況が見られる。さらに、疾患を抱えての入学等、専門医への受診を勧められる事例も増えている。合理的配慮については、現在規定を作成中。 ・スクールカウンセリングは、教員からの勧めで利用するケースが多く、予約をしても当日キャンセルが多い。効果的な活用につながるよう 10 月から月 2 回のうち 1 回は昼休みの時間枠に変更した。しかし昼の利用率は 0 %	・やまゆり祭は、学生主体で一生懸命さが伝わってくる取り組みであった。 ・社会人基礎力の調査結果は年次を追うごとに評価点の伸びが認められるが、共通課題である働きかけ方、創造力、発信力、ストレスコントロール、看護探求に対する具体的支援が必要である。 ・休学率の増加が課題となっているため、入学時からの個別支援を積極的に導入し、学生の悩みや不安の解消を図るべきである。また、カウンセリングの周知を強化し、メンタルサポート体制のさらなる充実を図ることが必要である。 ・スクールカウンセラーの人数やカウンセリングの開催回数は少ない傾向にある	・実習において体調不良で欠席する学生が増加している。実習では学内に比較して多数の者とのコミュニケーションが求められているが、主体的にストレスをコントロールしながら実習を行うことが難しくなっている。日々の生活から社会人としてのメンタルトレーニングが求められる。 ・特に実習においては、受け持ち患者を担当するため、失敗を恐れ不安が高まる学生が見られる。学内にいる時から学生自身が様々な体験や挑戦ができるよう、臨地のイメージをもち自信をもって実習を進められるような関わり	・社会人として求められる社会人基礎力の向上を目指し、特にストレスコントロール力や自ら発信ができる力を強化し、就業後も主体的に働きかけができる学生を育成する。
社会人基礎力		最終回／全 3 回																															
	1 年	2 年	3 年																														
アクション	5.33	6.28	6.69																														
シンキング	5.13	5.98	6.45																														
チームワーク	6.25	6.91	7.08																														
倫理性	5.39	6.11	6.84																														

2025/3/21 学校運営評価外部委員会									
		2. 社会に貢献しうる有能な人材の育成 1) 心身ともに健全な学生の育成と支援	1.担任（教員同士の連携）と保護者、カウンセラーとのタイムリーな連携（学生の状況に合わせた相談へ） 2.カウンセリングの効果的な運用と学生への周知とタイムリーな活用ができるような体制整備 ・実施回数・枠数、カウンセラー人員等の検討、GWS を活用したカウンセリングの予約・周知の検討 ・カウンセリング方法（メール等）の検討 3.喫煙や薬物使用禁止に関する啓発に関する講演会の実施 4.感染状況や感染対策の動向に応じたタイムリーな対応（特に実習中） 5.各種修学・奨学金制度の説明会実施と適宜相談対応	・スクールカウンセラー実施回数 ・休学者数 ・各種修学・奨学金制度等必要な学生の活用率	・スクールカウンセリング 2 回/月 1 年次 3.2%（前年度 11%） 2 年次 3.3%（前年度 3.2%） 3 年次 3.4%（前年度 9.2%） ・健康関連講演会 5 月「メンタルヘルスのセルフケア」 11 月「禁煙に向けた講演会」 奨学金貸与・給付利用者割合 ・県看護師等修学資金 7.3%（令和 5 年 7.6%） 1 年 6.3% 2 年 6.5% 3 年 9.0% ・日本学生支援機構 23.4%（令和 5 年 21.6%） <貸与>1 年 17% 2 年 17.5% 3 年 14.7% <給付>1 年 6.3% 2 年 5.4% 3 年 9.0%	であり（昼の予約は 2 名いたが利用せず）前年度より活用率は低く効果的な活用につながらなかった。5 月の講演会でメンタルヘルスのセルフケアにつながったことや、担任が面接を細かく実施しメンタルサポートにつながった効果もあったと考える。カウンセリングの効果的な運用と学生への周知とタイムリーな活用ができるような体制整備の再考、実施回数・枠数、カウンセラー人員等の検討、GWS を活用したカウンセリングの予約・周知の検討を行う。 ・奨学金の貸与・給付に関する学生からの相談は、奨学金制度や手続きを丁寧に説明し、奨学金制度が適切に利用できるよう努めた。	とを感じるため、学生がカウンセリングを受けたいと感じた時にタイムリーに受けられる体制を整えていくことは大切である。	が求められる。 ・スクールカウンセリングに気軽に 行けるよう、匿名性を確保した相談予約ができるようシステム作りが必要である。また、教員と学生間の関係に加え、学生同士（クラスメイトや先輩・後輩等）で情報交換できるような関係性の構築も重要である。	・学生のメンタルサポートのため、スクールカウンセリングが効果的に活用できるような体制の整備や学内における支援の強化を図る。
		2) 看護師国家試験に合格 100%	1.客観的データに基づく分析（業者分析活用等）による本校学生の課題の抽出 2.上記分析をもとに、1～2 年次の各看護学の授業に含み、実習においても問題を解き、卒業時の補習講義においても活用する。 3.模擬試験実施と実施後の課題抽出と学生へのフィードバック（全体と個別課題を抽出し主体的な学習へ） 4.冬季・補習講義、講座の開催と学生の理解度を確認し、課題抽出のもと低正答率の問題を重点化した学習を進める 5.メンタルサポート（ケースレポート指導教員が中心にチューター制活用、メンタルトレーニング、面談・直前講義等）	国家試験合格率 ・模擬試験 受験者数 ・模擬試験 全国平均差 ・模擬試験 成績低迷者の得点率 ・国家試験対策（講座・補習講義）出席率 正答率	・第 113 回国家試験合格率 48 回生 98.7%（全国 90.1%） ・国家試験ガイダンス実施各学年 1 回 ・模擬試験参加率各学年 100% 1 年次 1 回 2 年次 2 回 3 年次 8 回 3 年次最終模擬試験学校成績 必修 9 割 一般状況 7 割 ・3 年次国家試験対策講義 夏期補習講義（外部講師）2 日 冬期補習講義（外部講師）4 日 冬期領域強化補習講義 7 日 ・3 年次メンタルトレーニング 1 回(1 月)	・国家試験合格 100%を目指し、3 年次の模擬試験回数を 2 倍に増やし、模擬試験後の振り返り時間を多く設けた。昨年度からチューター制を導入し、メンタルサポート含め国家試験対策を強化した。成績低迷者に対して、模擬試験の結果を分析したうえで、少人数制グループ学習や、個人の進捗状況に合わせた個別対応を行い成績の底上げを強化している。 ・1、2 年次は国家試験問題を授業内容に反映し、月 1 回の国家試験対策時間を設け、低学年から国家試験を意識できる取り組みをしている。	・国家試験対策では、学生の課題を抽出し 1.2 年次より取り組むなど計画的に対策を実施、成績低迷者に対しては模擬試験の結果分析と個別対策をされており、丁寧な対応をしている。全国平均を大幅に上回る合格率に繋がっている。 ・国家試験対策では、学生の心のケアにも配慮しており、精神的な支えとなっていた。		
		3) 神奈川県内の医療機関等に 100%就職	1.1 年次：実習前のコミュニケーションスキルアップ研修 2 年次：学生状況をふまえた就職活動の支援 2.就職相談（個別相談、模擬面接、履歴書の作成指導） 3.就職先、進学先からの推薦制度活用に向けた計画的な運用と学生指導 4.前年度卒業生へやまゆり祭等開催についての周知	・県内就職率 ・就職ガイダンス実施回数 ・模擬面接実施人数（回数） ・就職に関する個別面接回数 ・卒業生のやまゆり祭等参加人数	・就職ガイダンス実施 1 年次 2 回 2 年次 3 回 ・模擬面接実施率 83% ・3 年次県内就職率 100%（前年度 92.1%） 進学 1 名（助産学科） ・1 年次実習前マナー講座 ・卒業期研修ナースセンター講話 ・やまゆり祭参加卒業生 21.9%（前年度 53.8%）	・就職支援担当教員と担任が連携し就職支援を行った。試験不合格者へは個人面接を重ね、再度就職先選定を行った。進学者の支援とともに全員の進路決定につながった。 ・卒業生へのやまゆり祭の周知はインスタグラムで行ったが、卒業とともに SNS を退会した学生が多く、十分な周知ができなかったことが参加人数減少の要因であると考ええる。参加した卒業生からは、就職して 3 か月経ち不安や悩みを同級生と分かち合い、教員と話せたことが安心感につながったと意見があった。卒業生への支援は、就職先と学校の良好な関係構築にも繋がるため、今後は周知方法について検討する。	・県内就職率 100%は神奈川県和学校としての使命を果たしている。 ・就職 3 か月後のフォローは卒業生にとっても、就職先としても精神的安定となる心強い支援と感じるため引き続きの支援と周知を期待する。		
4		1. 学生確保対策強化の継続 1) 効果的かつ	1.本校の魅力と学生の活動の様子が伝わるパンフレットの更新と電車内広告、フライヤー設置等による周知	・本校パンフレットの更新と配布 ・インスタグラムのフォ	1. 広報 ・県医療整備・人材課、県立看護専門学校と入試の検討	・18 歳人口の減少とともに、入学定員の未充足という深刻な問題に直面している。今年度、電車内広告、学校ホームページ、オープンキャン	・入学受験者数の前年度比 5 割減は、学校存続の危機的状況であり、看護学校全	・県立看護専門学校として質の高い学生を育てることが、受験生のモデ	・オープンキャンパス等で在校生が活躍でき

2025/ 3 /21 学校運営評価外部委員会										
	入 学 生 確 保	実効性のある広報活動 2) 入試を実施し、優秀な学生の確保	・次年度の周知方法の検討 ・県医療整備・人材課との連携のもと、県立学校としての魅力の発信 2.学校説明会の実施により推薦対象校との教員と意見交換を行い受験者背景のリサーチを行う 3.学校説明会やオープンキャンパス 教員全体・学生とともに実施、学生の学校生活を見てもらい受験動機の向上 4.本校の魅力が伝わるホームページやInstagramの改定（学生とともに） 1.安全な入学試験の実施 入試マニュアルの整備 2. 総合型選抜入試導入可否に向けた検討 3.社会人入試（施設長推薦）及び推薦入試指定校枠に関する評価 4.上記分析に基づいた実効性のある次年度計画の策定 5.入学前支援に関する会の準備及び開催、開催後の評価 【創立 50 周年記念式典】 ・式典の円滑な実施のための周知及び学生が参加できるプログラム構築と当日の安全な運用 ・記念誌の発行と配布（在校生、教員、実習施設、講師等）	ロワー数 ・学校説明会 参加校数 ・オープンキャンパス参加者数 ・指定校区分からの応募者数 ・入学者数 ・入学辞退者数 ・入試形態ごとの受験者数・合格者数 ・入学前支援に関する会の開催への参加数 【創立 50 周年記念式典】 ・学校祭と同日における式典の円滑及び安全な実施 ・年度末まで記念誌の発行と配布数	・高校ガイダンス 22 校実施 ・高校生インターシップ受け入 11 名、中学校訪問 1 校 ・社会人推薦枠施設への広報活動（22 施設） ・県内大学のポータルサイトを利用した広報実施（2 回） ・産経新聞神奈川版の地域面に後期入試情報掲載 ・県のたより掲載（2 回） ・学校説明会（14 校参加） ・入学案内サイトに学校情報掲載（2025 年度より） ・次年度に向け学校パンフレット、フライヤー作成準備 2.オープンキャンパス 5 回開催 参加者数合計 319 名（4 回まで） 3. ホームページ更新回数 16 回（2023.4 月・2025. 2 月）本校ホームページの整理 4.指定校推薦校検討 5. Instagram更新回数 23 回、フォロワー数 417 人 入学受験者数 昨年度比約 5 割減 ・入学前ガイダンス（2 回） 2/7、3/13	パスの内容を検討するなど広報に力を入れた。また、新型コロナウイルス感染症拡大により中止していた学校説明会を開催し、高等学校の進路担当教員と情報共有できた。 しかし、令和 7 年度入学予定者は例年の約 5 割減という結果となり、県の医療整備・人材課や県立看護専門学校と受験生確保に向けた検討をおこなった。入学定員に対する受験生確保に至らなかった原因として、少子化、大学志向、社会の景気回復、多様な働き方等が考えられた。このことに対しては教職員で分析をおこない、学校の強みや特色を明確にし、どこにターゲットを絞って広報を行う必要があるか検討した。 ・今年度、2 月に後期一般入試枠を設け、受験生の確保を目指した。令和 8 年度入試区分についても受験科目や日程など検討を重ね、変更した。次年度はオープンキャンパス開催時期を前倒しし、内容を見直した。入学後、スムーズに学校生活に適應できるように、入学前ガイダンスで保護者会や、学習習慣が継続できるような内容を盛り込んだ。 【創立 50 周年記念式典】 ・学校祭と同日の開催となり、全学年出席、来賓者 3 名から祝辞をいただき、作成した記念動画を視聴した。在校生の言葉も述べ学生全体で共有することができた。記念誌は、記念誌寄稿者および関係施設（50 部程度）へ配布予定。	体の共通課題ではないか。 ・受験生確保に向けて最大限対応と看護の魅力をアピールする必要がある。 ・「よこはま看護専門学校に行けば学業だけでなく〇〇ができる看護師になれる」といった付加価値が得られるような工夫が求められる。 ・スキルを身につけられることや、先生方の丁寧な支援等、県立の専門学校の魅力は大きいので、良さが高校生に伝わるとうい。 ・現定員は多いのではないか。定員確保のために入学生の質の低下が懸念される。 ・社会人のリスクリングが取り上げられている社会情勢のため、国家資格を取得できる学校として多方面にアピールするのも良いのではないか。	ルとなり、本校が来てほしい受験生確保につなげられると考えられる。現在の状況は本校にとって危機的な状況であるが、次年度の入学生の減少を好機ととらえ、丁寧に学生を育てることを学校全体で取り組みたい。 ・次年度に向けて、入試区分や試験科目の変更や、入試回数を増やすことで受験しやすい体制を整えた。 ・広報については精査を行い、本校の強みをアピールできるよう、効果的な広報活動を実施することで受験生確保につなげていきたい。	る機会を増やし、本校の魅力を発信していく。 ・入学案内情報サイト等の活用により、効果的な広報活動となるよう職員全体で取り組みを進める。 ・社会人については、国家資格取得や専門実践教育訓練給付金制度を活用できることを広報でアピールしていく。	
5	社 会 貢 献 ・ 地 域 貢 献	1. 主体的に学べる教育活動の円滑な実施 1) 学生とともにつくる学校運営を実施	1. 県立の養成所として、県や実習施設、地域等のボランティア活動やイベント等とコラボレーション	・ボランティア参加件数	1)「骨髄バンク登録推進運動命のつどい」ボランティア 1 年 10 名 2) リラの家ボランティア 2 年 1 名 3)アレルギー児サマーキャンプ 8 月 1.2.3 年 9 名 4) 第 26 回神奈川看護学会 2 年 4 名 5)第 30 回福祉祭り 1 年 27 名 6) やまゆり祭 ともしき・老人クラブ/ボッチャ ・実践教育センター教員・教育担当者養成課程、済生会横浜市東部病院実習指導者養成講習会等の講師 9 名 ・二俣川地区県機関情報交換会 1 回/年（災害備蓄等）	・令和 3 年度から「ボランティア活動支援制度要綱」規定のもと奉仕の精神の育成に努め、前期 4 回、後期 1 回と県立の養成校として積極的に活動することができ、実習校や地域との関係の中でボランティア活動が浸透してきた。ボランティアに参加する学生に偏りがあるため学生全体に広がるよう支援する。 ・やまゆり祭や授業では老人クラブ連合会等との連携により地域交流を深めることが出来た。ボランティア活動を通し理念であるヒューマン・ケアリング育成につながる。 ・今後もInstagramによる本校の魅力や活動の発信に限らず、地域活動の拡大を図りながら地域・社会貢献を行う。	・やまゆり祭や授業における老人クラブ連合会との連携を通じて、地域との交流が深まっている。 ・地域包括ケアシステムを考えると、医療は地域の中で多職種と関わり合いをもって行われる場面が多いため、地域におけるボランティア活動は看護師を目指す上で大きな意味を持つ。自ら積極的に活動する力が育まれるため有益な活動である。	・学校祭や授業において、地域との交流を行い、様々な年齢の方との交流を通し、主体性やコミュニケーション能力の向上につながっている。今後も学業を主軸にしながらもボランティア活動の幅が広がるよう支援を行っていく必要がある。	・県立看護専門学校の学生として主体性を育てるため、地域貢献の視点を大切にボランティア活動の支援を継続していく。	